

第 8 章 エリザベス朝時代の庭園に関する文献 [下線部は『都市緑化技術』No.115 掲載箇所]

(仮訳)

“ Bring hether the Pinke and purple Cullanbine With gelliflowers Bring Coronations, and Sops in wine, Worne of Paramoures Strowe me the ground with Daffadowndi And Cowslips and Kingcups and loved Lillies, The pretty Pawnce And the Chevisaunce Shall match with the fayre flower Delice. ”	ここにナデシコと紫のオダマキを持ってきて ニオイアラセイトウと一緒に カーネーションとクローヴピンクを持ってきて 恋人たちが身にまとう花 私のため地面をラッパスイセンで敷き詰めておくれ そしてカウスリップ、キンボウゲ、愛すべきユリも 可愛らしいパンジー そしてアラセイトウ 美しいアイリスと競わせよ
--	---

SPENSER

スペンサー

[訳注:『羊飼の暦』4 月より Coronations = carnations Sops in wine = clove-pinks Pawnce = pansy
Chevisaunce = Chivalry の意?]

イングランドがヘンリー8世の治世下にあった時代、大陸では植物学に関する科学の大きな飛躍が成し遂げられつつあった。[イタリア北東部の]パドヴァでは1545年に植物園が創設され、その後すぐにピサにも一つ作られた。しかし、イングランドで植物園を自慢できるようになるのは1世紀近く後になってからのことであった。わが国以外のヨーロッパでは植物学の文献についても私たちよりも進んでいた。『薬草実用百科』*Aggregator Practicus di Simplicibus* [訳注]は多分1475年から80年の間にシェーファー-Schoeffer [Peter~, 1425頃~1503年頃 ドイツ・マインツの印刷業者]によって出版された。

[訳注: Serapion 著の *Aggregatus in Medicinis Simplicibus, The Book of Simple Medicaments* のことか。Simple とは薬として数種の薬草を混ぜる前の単体の薬草の意]

『健康の庭園』*Ortus Sanitatus* [著者不詳]は1485年に出版され、これに続くすべての植物学の仕事の基礎となった。それはまた[図版入りとしては初めて]英語で書かれた『大植物誌』*Grete Herball*の礎ともなった。この本はピーター・トレヴェリス Peter Treveris [1525~32年頃活動]により出版され、何版か版を重ねた。初版は1516年と言われているが、この版の本の存在についてはいささか疑問があるようで、多くの本が現存している一番古いものは1526年に出版されたものである。メイスナーの『植物誌』*Herbal*の翻訳は1530年頃に出版されたが、最初にして本当のイングランドの植物誌はウィリアム・ターナーに負っている。植物誌の文献はおそらくガーデニングよりは植物学の研究者の間でより知られていたが、初期の植物学を研究することで、庭園の歴史に横から光が当たり多くの知識を得ることができる。特にターナーはこの歴史の中で一つの地位を占めるに値すると思われる

のは、植物学だけではなくガーデニングについても大きな仕事をしたからである。彼はキューに自分自身の庭園を所有しており、その著作の中で当時の庭園のいくつかについて紹介している。彼はノーサンバランドのモーペス Morpeth に 1510 年から 15 年の間に生まれた。ケンブリッジに学び、そこでラティマー Latimer [Hugh~, 1485? ~ 1555 年 宗教改革者] とリドリー Ridley [Nicolas~, 1500? ~ 55 年 宗教改革者] と友達であった。ターナーは宗教改革論者であったため、彼の本は 2 度発禁となり廃棄を宣告された。彼はイタリア、ドイツ、オランダを旅行しイタリアで医学博士号を授与された。イングランドに帰国後、教会のいくつかの役職に登用された。ウェルズの司祭 Dean of Wells であったが司祭の職を解かれ、メアリ - 女王の治世時に追放された。ただエリザベス女王の即位に伴いしばらく復権し 1568 年 7 月 7 日にこの世を去った。彼の書いた『植物に関する小冊子』*Libellus de Re Herbaria* は 1538 年に出版され国王に捧げられた。1548 年の「ハーブの名前」“The Names of Herbs” は彼の支援者である護国卿サマセット the Protector Somerset [サマセット公爵 Edward Seymour, 1500 ~ 52 年 エドワード 6 世の摂政] に捧げられ、その序文の日付はサイオンにある彼の家におけるものとなっている。サイオンは 1539 年のブリジット修道会 Bridgittines [1415 年ヘンリー 5 世の時代に設立、ヘンリー 8 世の修道院解散まで存続] の鎮圧に際してサマセットに与えられた。彼の著作全体を通じてその庭園についてしばしば言及がなされている。ターナーの『植物誌』*Herbal* は 1551 年に出版され、その「第 2 部」は 1562 年に出版された。

トーマス・タッサーは農業に関して広く知られた本の著者である。 1523 年から 25 年頃にエセックスのライヴンホール Rivenhall に生まれた。小さい頃は歌手としての訓練を受け、セントポール寺院合唱団で歌っていた。それからイートンではニコラス・ユードル Nicolas Udall [1505~56 年 学者・翻訳家・劇作家] に指導を受け、1543 年にケンブリッジで学び、パジェット卿 Lord Paget [William~, 1506 ~ 63 年 政治家] の部下として裁判所で働くまでケンブリッジにいた。裁判所生活を 10 年した後、引退して Cattiwade の農場暮らしを始めた。そこは、エセックスとの境界にあるサフォークのブランチム Brantham 教区にあった。彼が『農業で成功する 100 の要点』*One hundred Pointes of Good Husbandrie* という詩を書いたのはこの農場であり、それは 1557 年のことであった。その後すぐに彼はこの農場を去り、何年かはあちこちと動き回った。イプスウィッチ Ipswich、ノーフォークのウェスト・デラム West Dereham、ノリッジ、エセックスのフェアステッド Fairstead、ロンドン、そしてケンブリッジに行き、1580 年にロンドンで亡くなった。彼は最初の本を敷衍して、1573 年には『農業で成功する 500 の要点』*Five Hundred Pointes of Good Husbandrie* 初版を出版した。タッサーは善良で実用的、素朴であった。詩の中で庭園栽培のために役立つヒントを与えてくれたが、それは各月ごとに書かれた農業の要点の中にガーデニングについても触れる形をとった。その他の「要点」としては農業に関するあらゆる分野が含まれており、家事に対するアドバイスのほか、クリスマスにはどうするか、奥さん、子供、使用人、友人とどうつきあうかなどがある。農業に関する彼の指示についてすべて従おうとす

る人はほとんどいないかも知れないが、この最後の忠告は今でも十分通用するものである。
う。

(仮訳)

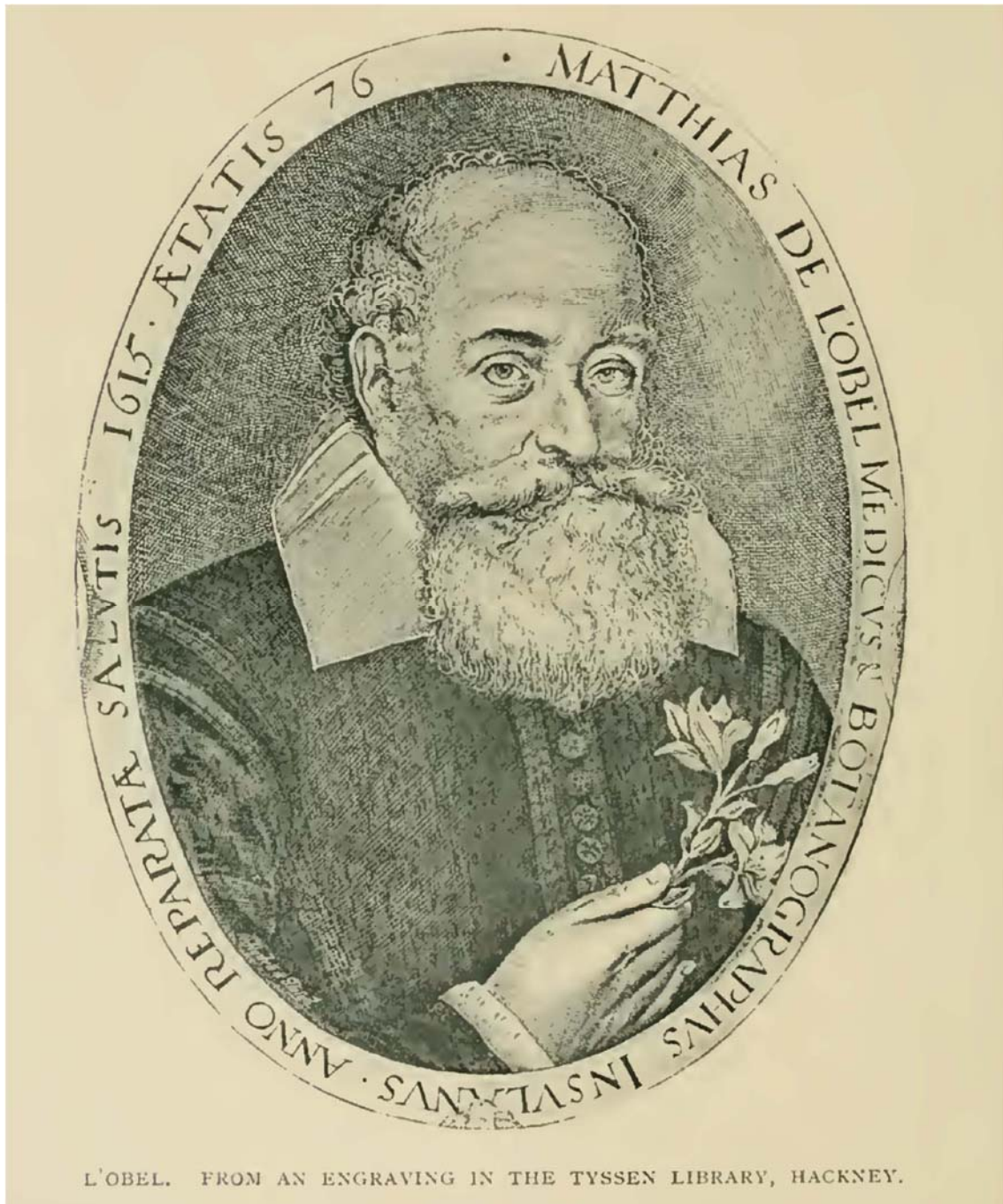
“Good friend and good neighbour that fellowie gest 良い友人と良い隣人とは、親しく受け入れて
With hartilie welcome, should have of the best.” 心から歓迎してくれる、そういう人が一番

ウィリアム・ブレインは学識深い医師であり、『健康の管理』*The Government of Health* (1558年)を著した。薬に使うハーブについて書かれたものだが、ガーデニングについて興味深い情報もこの本から拾い集めることができる。

この時代の植物学の歴史はやや入り組んでいるが、それはあまりにも一つの本から別の本へと過度に引用がなされ、同じ図版がいくつもの本に使われたりしたからである。どの国の著作家たちも古代の著者から自由に引用し、特にディオスコリデスとカリヤメラ Columella [Lucius Junius Moderatus~, 4~70年頃 ローマ帝国における農業に関する著作家] は広く引用された。前者のディオスコリデスは、学識豊かな植物学者で医師であるイタリア人、マッティオリ Mattioli [Pietro Andrea~, 1501~77年頃] により、1544年にイタリア語に翻訳され、多くの注釈が加えられた上で出版された。もう一人の16世紀の偉大な植物学者であるドドエンスは、ディオスコリデスからたくさん引用しているが、1517年にメヘレン Mechlin [ベルギー北部の都市] で生まれた。彼はアントワープで1554年に『植物の歴史』*A History of Plants* を出版し、これはオランダ語で書かれていたが、クルシウス Clusius (シャルル・ド・レクリューズ Charles de l'Excluse) [Carolus~, 1526~1609年 フランス生まれのフランドルの医師・植物学者] によりフランス語に翻訳され、1557年にアントワープで出版された。このクルシウスの仏語訳をヘンリー・ライトが英訳し、アントワープで1578年に出版され、この3つの言語とも同じ木版が使われ、これらの本のそれぞれが版を重ねた。そうこうする間に、ドドエンスは元の著作を大幅に敷衍して、30巻からなる新しい著作『植物図譜六部』*Stirpium Historiae, Pemptades sex* として集大成を図った。この偉大な植物学の書はプリースト博士 Dr. Priest により英訳されたが、博士はその翻訳の出版を見ることなく亡くなった。

ジェラードの『植物誌』*Herbal* (1597年) は、端から端までドドエンスの著作に拠っており、その一部は翻訳そのものであった。ジェラードは、「他の言語で書かれた様々な植物学を熟読した」と明言しているものの、こんなに広範に引用したとは認めていない。ジェラードの『植物学』第2版、これはジョンソン Johnson [Thomas~, 1644年死去 英国野外植物学の父 王党派] によって訂正が加えられ増補されたものであったが、その「読者への序言」の中でこの事実が指摘され、さらにそれだけでなく、プリースト博士による翻訳について、ジェラードは失われたと言っていたが、実はジェラードはそれを手に入れて大幅に使用しており、それはジェラード自身にはラテン語の知識が十分に備わっていなかったからだ、とジョンソンは断言しているのである。ジョンソンは「著者がこのことを読者に隠そうと

したことは誉められたものではない」と書いている。



L'OBEL. FROM AN ENGRAVING IN THE TYSSEN LIBRARY, HACKNEY.

[図 8-1] ローベル ハクニーTyssen 図書館所蔵版画より

ローベル L'Obel とギャレット Garret [James~, フランドルの薬剤師 ロンドン在住]の両人は、この植物誌の印刷中にそのラテン語の誤りを正す手伝いをした。ローベル自身は植物学の本『植物に関する覚書』*Stirpium Adversaria* (1570 年) の著者である。本書は、彼がモン

ペリエで勉強していた時、知己を得た Peter Pena の助けを借りた。マチアス・ドウ・ローベル Mathias de Lobel ことローベル L'Obel は 1538 年リールの生まれで、ヨーロッパ各地を旅行し、アントワープとデルフトで医師として働き、そしてイングランドへと渡った。久しくハクニーのズーシュ卿所有の庭園の管理をまかされ、「国王の植物学者」(ジェームズ 1 世)の地位を占めた。よく知られている「ロベリア」lobelia は彼を称えてプリュミエ Plumier [Charles~, 1646 ~ 1704 年 フランスの植物学者] により、そう名付けられた。科学的な分類の最初の兆しが彼の業績の中には見られ、その意味で、そのような試みをしようともしなかったドドエンスよりも優れていると考えられている。彼はマッティオリのことを研究し、しばしばそのことに触れており、学識者からは高く評価されてはいたが、ラテン語で書かれ一度も翻訳されることがなかったので、英語で書かれた同時代のジェラードのようには人気を博すことはできなかった。ジェラードの『植物学』は花に関する文献の中ではいつでも突出した位置にあり、その第 2 版はトーマス・ジョンソンの極めて巧みな編集により、その業績は物凄く人気と価値が高まった。

ジョン・ジェラード John Gerard (または Gerarde とも書く) は 1545 年、チェシャー州ナントウィッチ Nantwich に生まれ、1607 年にこの世を去った。彼は医師で「薬草」の専門家であるだけでなく、実践的な庭師であり、彼が住んでいた当時はロンドン郊外であったホルボーンで自分自身の薬草園を栽培していた。彼の最初の著作は、彼の庭園の植物のカタログであり*、そこには在来、外来の 1100 種ほどが載せられていた。

*この本の大変珍しい 1 冊が大英博物館に所蔵されており、D. ジョンソン Johnson により復刻編集された。

20 年間にわたりパーリー卿の庭園を監督し、彼の偉大な著作をこの支援者に捧げた。彼の『植物誌』はオリジナルなものと言いつけることはできなかったとは言え、翻訳者、翻案者としては、独自の業績と言える不滅の足跡を残した。花が育っている土地ごとの状況 localities of flowers に関する彼の記述は特に目を引くものであり、それとともに植物の贈呈を受けた友人たちや彼らに関する情報を記述するやり方も同じように特徴的であった。たとえば、次のような記述がほとんど各ページに出てくるのである。「シペリペジウム [アツモリソウの一種] Cypripedium Ladies' Slipper。私のとても仲が良い友人である薬屋のギャレット氏 Garret よりもらって庭に植えてある」、「ゴールデンモスヴォルト the golden Mothwort、別名カッドウィード [ハハコグサの一種] Cudweed (*Helichrysum*) は・・・盛りが過ぎる前あるいは萎む前に採取すれば、その後長い間美しさを保つことは、私自身がこの目で見たとこである。私が見たのは、女王陛下顧問弁護士の事務員の一人であるウェイド氏が持っているパドバから・・・彼に送られたものであった」。



[図 8-2] ジェラード 著書『植物誌』扉のページより 1597年

「コタニワタリ的一种 finger Hart's tongue・・・私はこれをエセックスのマッチダンモウ Much-dunmow にある Cranwick 氏の庭園で見つけ、彼は私の庭園用に植物を一つくれた」。このようなジェラードを援助した友人の数は膨大であったが、彼らのうちほとんどの人物については、たとえば「ロンドンの学識深い商人であるジェームズ・コール氏、植物の愛好家で植物の知識に関して極めて熟練している」とジェラードが紹介している数少ない言葉以外にはまったく知られていない。「ガース氏は尊敬すべき紳士で、かつ珍しい植物をとて喜んで人だが、彼はとても気持ちよく私に」クルシウスから受け取ったナルコユリ的一种 Solomon's seal を「分けてくれた」。しかしながら、何人かの人々の名前はしょっちゅう

出てくるので、彼らに関してはもう少し詳しいことがわかっている。トーマス・ヘスキース Thomas Hesketh [1548 ~ 1605 年 政治家] の名は繰り返し出てくるが、これは彼が主としてランカシャーおよびイングランド北部におけるある種の植物の収集家であって、またジェラードの庭で栽培するように見本を送ってきたからである。エセックスのトーマス・エドワーズ Thomas Edwards も植物学者であってイングランドの野生の花の収集家であった。ロンドンの商人、ニコラス・リート氏 Nicholas Lete は、自分自身でイングランドとフランスで花を探しただけではなく、「珍しくて美しい花や植物をこよなく愛したため、注意深くシリアに人を送りアレppo Aleppo でその使用人を雇って収集をしたので、私自身を含め全国の同じような人々が彼に大変恩義を感じる事となった。そしてこれはその他の多くの国でも行われた。」彼がこの国に持ち込んだ植物の一つにキャベツがある。それは「青みがかかった緑色の」「しわの寄った葉っぱ」であった。ジェラードはポーランドから黄色のナデシコを手に入れたことにも触れており、彼のコレクションの幅広さを表している。彼はまたウィリアム・マーシャル William Marshall というお抱えの収集家を「地中海に派遣し」そこからプラタナスの種とヒラウチワサボテン prickly pear、すなわち「棘のあるインドのイチジクの木」を持って来させた。

ジェームズ・ギャレットは、熟練の庭師で特にチューリップの栽培に長けていたことが他の資料からもわかっている。彼は「ロンドンの学識深い薬屋」で、優秀なラテン語の学者、そしてジェラードやクルシウスに知識を教え、植物を与えるような寛容な人だった。ジェラードが取り上げた友人すべてを列挙するととんでもない数になりうんざりするほどである。これらの手助けをしてくれた友人のリストは、1633年版を見れば、さらに大きく増えることになる。それを見ると、ジョンソンの知り合いもジェラードと同じように著名な人たちであることがわかる。これらの昔の植物学者たちが互いに手紙をやりとりし、助け合った姿を知ると爽やかな気分になる。ジョンソンはジェラード以上に他の植物学者、医者と協調して仕事をし、希少な花を探すために一緒に探検旅行に出かけた。彼は、友人たちとイングランド南部、西部への旅行について描写したラテン語の論文を何本か書き、その『植物学』の中では仲間の収集家と歩き回った様子が繰り返し述べられている。一種の草について書いた時、「一度だけこれを見たことがあるが、それはロンドンの薬屋のトーマス・スミス氏とジェームズ・クラーク氏と、珍しい植物を探しにウィンザーの森に馬で出かけた時のことであった」と言っている。

トーマス・ジョンソンはヨークシャーのセルビー Selby に生まれたが、彼自身はロンドンの薬屋であり、スノウヒル Snow Hill に店を構えていた。このスノウヒルの店こそ、イングランドで最初にバナナが並べられたところである。ジョンソンはアージャント Argent 博士がバミューダで手に入れた果物の束を受け取った。ジェラードはアレppo から送られてきたピクルスにした品種しか目にしなかった。ジョンソンはこの果物の束をそれが熟すまで店内にぶら下げておいた。彼が言うところ：「これを見てある人たちは禁断の木の実と判断した；別の人たちは聖地からモーゼにもたらされたブドウだと思った。」彼は当代きって

の一番有名な植物学者であり、兵士として何回かその勲功を表彰された。彼は王党派の大義のために戦うべく軍隊に志願し、ベイジング Basing で負傷したことがもとで 1644 年に死去した。ジョンソンの最も重要な友人でかつ助手であったのはジョン・グッディヤーであった。彼は多くの在来植物を最初に発見したのと、彼の植物学に関する知識が群を抜いていたと思われるのは、ジョンソンおよびパーキンソンの両者によって彼のことが取り上げられている様子からうかがえる。このほかトーマス・グリッ Thomas Glynn とジョージ・ボウルズ George Bowles の二人も収集家であり、彼らの名前も決して忘れられてはならないものである。

ラルフ・タギー Ralph Tugby の名は今でこそあまり覚えられていないが、当時しばしば引き合いに出されたことから見て、ガーデニングの発展に大いに寄与したに違いないもう一人の人物である。ジョンソンによると、タギーはパーキンソンやトラデスカント一家とほぼ同じくらいに有名で、ウェストミンスター彼の庭園には当時希少であった多数の植物が植えられていた。彼はナデシコ pinks、カーネーション carnations、サクラソウ auriculas で特に有名で、彼が亡くなったのは 1633 年より前であったが、その死後も夫人が庭園を維持し続けたようである。ジョンソンはジェラードより約 800 以上多くの植物について記述し、多くの図版を付け加えた。植物学の完成版には 2717 種が収められており、この長大なフォリオ判のページ数は 1600 ページ以上に達した。

ジェラードの『植物学』の初版と第 2 版の間に、パーキンソンが『日のあたる楽園、地上の楽園』*Paradisi in sole Paradisus terrestris* を出版した。これは当時最も人気のあったガーデニングの本であった。この本で、薬用効能に関することが主役であるのは、植物に関するすべての初期の頃の本と同じであるが、その性格は他の植物学の本とは大きく異なっている。この本のタイトル自体、自分の名前の言葉遊びである「パーク・イン・サンズ (パーキンソンの) 地上の楽園」Park-in-Sun's Earthly Paradise となっており、この風変わりな新鮮で独創性溢れるタイトルはこの本全体の特徴となっている。パーキンソンは花に対する愛情とその美しさに対する感情をもって読者を感激させる力を持っており、数世紀を経た後もなお、『地上の楽園』*Earthly Paradise* を熟読することにより、彼の技に心を洗われ勇気づけられることのない造園家は一人としていないと思われる*。

*この本が子どもたちの心に呼び覚ますであろう感動は『メアリーの草原』*Mary's Meadow* にとても可愛らしく書かれている。ジュリアナ・ホレイシア・ユーイング著 Juliana Horatia Ewing



PARKINSON. FROM THE TITLE-PAGE FOR HIS "PARADISUS."

[図 8-3] パーキンソン 著書『楽園』扉のページより

パーキンソンは1567年生まれ、既に登場したすべての植物学者と同様に薬屋であった。ロンドンに住み、素晴らしい庭園を所有しており、彼もまた旅行したということは彼の著作を読めばわかる。彼は「ジェームズ国王の薬剤師」であり、チャールズ1世〔在位1625~49年〕により「王室首席植物学者」*Botanicus Regius Primarius*に任命された。彼はその著作『楽園』をヘンリエッタ・マリア女王に献呈した。彼の死亡した正確な日付ははっきり

しないが、それは 1640 年に『植物の劇場』*Theatrum Botanicum* [英名: The Theater of Plantes, or An Herball of Large Extent] と題した本を出版した直後だった。この本はガーデニングよりも植物学そのものの本であり、ジェラードの本よりもっと多い種類の植物について書かれていたが、分類については特に改善された訳でなく、その配列は主に医薬上の性質に従ったものであった。フランスの植物学者、ジャンとガスパール・ボーアン兄弟 Jean and Gaspard Bauhin [兄ジャン 1541 ~ 1613 年、弟ガスパール 1560 ~ 1624 年 スイス生まれ 植物学者] による著作はジェラードの『植物学』の後に出版され、パーキンソンはこれらを、ローベルのものと同様に活用した。パーキンソンの図版の原版はイングランドで作られた*。ジェラードとジョンソンのものは、ターナーの大部分と同様に海外で作られたものであった。
*これらの木版の歴史については『パルトニー著 概説植物学の進歩』1790 年第 12 章参照 *Pulteney's Sketches of the Progress of Botany*

ジェームズ 1 世とチャールズ 1 世の時代の最も多忙な研究者、収集家は 3 世代にわたるトラDESCANT 一家であった。祖父はオランダ人で、多分ジェームズ 1 世の時代の早い頃にイングランドにやって来た。次のジョン「父」はソールズベリー第一卿・大蔵卿の庭師であり；次いでウォルトン卿 Lord Wolton、バッキンガム公爵、1629 年にチャールズ 1 世の庭師に任命された。彼ら一家は皆ヨーロッパ中を旅行し、父はバーバリー諸国 Barbary [アフリカ北部地域] にも行き、孫はヴァージニアにも渡航した。旅行中、彼らは珍しい物を集め、「トラDESCANT の館」*Tradescant's Ark* という名の博物館を設立し、そのカタログは『トラDESCANT 博物館』*Museum Tradescanteanum* として 1656 年に出版された。最後のトラDESCANT が 1662 年に死んだ時、彼は博物館をアッシュモール氏 Ashmole [Elias ~, 1617 ~ 92 年 古物収集家] に残し、それはオックスフォード大学に遺贈された。博物館のほか、ランベス Lambeth の自宅には立派な庭園があり、輸入した植物の多くをここで栽培していた。ここには国王、女王が訪れ、あらゆる階層の学識者のリゾートとなった。この庭園の名残は 1749 年には存在しており、その年に、サー・ウィリアム・ワトソン Sir William Watson [1715 ~ 87 年 医師・自然哲学者] がこれを描写するペーパーを王立学士院 the Royal Society [† *Phil. Trans.* 第 46 巻, 160 ページ] のために書いた。彼は 2 本の大きなアービュタスの木 [イチゴノキ] *arbutus trees* のことに気づいたが、これらの木は「この種のほとんどの木が枯れた」1729 年と 1740 年の厳しい寒さに耐え抜いたものだった。「果樹園には」高さ 20 フィート、直径約 1 フィートの「一本のクロウメモドキ」*Rhamnus Catharticus* (Buckthorn) があった。ワトソンは、トラDESCANT 一家が持ち込んだ落葉樹のラクショウ [落羽松 ヌマスギ] 「落葉性のアカシアに似た葉を持つアメリカのサイプレス」*Cupressus americanus acacia foliis deciduis* (*Taxodium distichum*) についても書いている。ユリノキ tulip-tree も彼らが持ち込んだものの一つである。イーヴリン Evelyn [John ~, 1620 ~ 1706 年 日記作者・造園家] はこのように書いている：「ヴァージニアのポプラ、それはジョン・トラDESCANT により、チューリップの木という名前で(花の形が似ていたので)

初めてもたらされたと思うが、わが国の植物学者の誰一人として大した注意を払うことはなかったと思う。私はもっとこの木が欲しいと思ったが、それを高く育てる elevate ことは当初難しかった」*。

*最も古いユリノキの一本がエセックスのウォルサムにある。「今まで見られた中で客観的にも主観的にも最大 the largest and biggest のもので、英国の中ではピーターバラ卿の 1 本を除けば最大である」 - ファーマー著『ウォルサムの歴史』1735 年 *History of Waltham*, Farmer

彼らが持ち帰ってきた他の植物の中には、幸運なことに彼らのことを思い出させるものがある。トラDESCANTのラッパスイセン、これはパーキンソンの本では「大バララッパスイセン」the great rose daffodil と呼ばれたが、八重 Plenissimus のことであり、今でも「すべての二重のラッパスイセンの中で最も大きく、濃い黄色のラッパスイセン」と言われる。トラDESCANTのアスターは今もなお彼らの名前を付しており、トラDESCANTティアス、すなわちムラサキツユクサ spiderworts [*Tradescantia virginiana*] は、属の名称として広く知られている。旅行中にトラDESCANTは彼の支援者であるソールズベリー第一伯爵に買物をし、その時の請求書の一部がハットフィールドに保存されている。それらの多くの品目は興味深いものであり、既に知られている植物の値段がわかるだけでなく、彼が最初に紹介することとなった新種についても示されている。

以下はこの興味深い記録からの抜粋である（†ハットフィールドにあるオリジナルな写本より、ソールズベリー侯爵のご厚意による許可を得て）： -

「1611 年 1 月 3 日 - ジョン・トラDESCANTの請求書、これは伯爵のため彼に買われた花の苗、種、樹木、植物のもの：オランダでは - オランダのライデンで - バラ Roasses の苗と変わっていて珍しい低木 3 ポンド - 加えてオランダのハーレムでセイヨウサンシュユの一種 *Cornellis Helin* の早生の熟したサクランボの実のついた木 32 本を 1 本 4 シリングで計 6 ポンド 8 シリング - アネモネと呼ばれる花を 5 シリング - プロバンスローズ *Province Roses* を 16 本 8 シリング - クワの木 2 本 6 シリング - 大きなアカフサスグリ *great red currants* 6 本 1 シリング - ネズコ *arbor vita* 2 本 1 シリング - パイモ 40 本、1 本 3 ペンスで 10 シリング。1611 年 1 月 5 日、ブリュッセルとオランダで購入・・・早生の熟したポルトガル *portingall* マルメロの木 1 本 6 シリング - ライオンのマルメロ *lion's quince* の木 3 シリング - ナポリの大きなセイヨウカリンの木 2 本 5 シリング - ハーレムでチューリップの球根 100 個 10 シリングで 800 個 4 ポンド - 大きなクロスグリ 1 ダース *on(e) dussin* 1 シリング - the boores cherye と呼ばれるとても大きなサクランボ 12 シリング - 白アプリコットと呼ばれるアプリコットの木 6 シリング - 加えて *peere* ブドウと呼ばれる大公庭師 *the Archedukes gardner* を 10 種類 6 シリングで購入 - 大公サクランボ *the Archedukes cherye* と呼ばれるサクランボの木 12 シリング - さらに John Jokkat 氏から、二重咲の *Echatega* 白とオレンジ色のマルタゴンリリー *the martygon pompone blanche*, *the martygon pompong orang coller*、カルセドニーアイリスなど 2 種類 *the Irys calsedonye and the Irys susyana* を 2 ポンドで購入。1611 年 1 月 5 日 - フランスで購入 - バリで購入。ザクロの木を根元にある多数のその他の小さな木と一緒に 6 シリング - スパニッシュゴース [ヒトツバエニシダの一種] *genista hispayca* の束 2 シリング - オレンジの木で接ぎ木し

た1年物、8鉢を1鉢10シリングで4ポンド - セイヨウキョウチクトウ *ollyander* の木6本、1本ハーフクラウンで15シリング - マートル [ギンバイカ] *Myrtil* の木7本、1本ハーフクラウンで17シリング 6ペンス - 別の籠に入ったイチジクの木2本、白イチジクと呼ばれるもので多数のその他の珍しい低木と一緒に、ロビンス氏が私にくれたもの4シリング - またマスカットと呼ばれるブドウ2束4シリング - *Biggandres* と呼ばれるサクランボ1本2シリング、24本で2ポンド [8シリング?] - イトスギ *Sypris* の木1本1シリング、200本で10ポンド - 黒クワの木1本2シリング、17本で1ポンド14シリング - 桃 *the troye* の木4本、1本2シリングで8シリング (および *alberges*, *malecotton* 桃も同じ値段で)、二重咲白のニオイアラセイトウ (ストック) *stok gilliflower* の鉢および別の種類のアラセイトウに3シリング 。

これらの請求書の合計は110ポンド8シリング9ペンスに上ったが、それは植物の代金と数シリングの籠の代金、そして南京錠と荷造り用の入れ物 *hampers* [通例ふた付きのヤナギ細工の籠] の代金もあわせたもので ; - 運搬費用は別にかかる。またサー・ウォルター・コープ *Sir Walter Cope* [1553頃~1614年] から送られてきた38ポンドの最初の請求書、それはソールズベリー卿と同じ時に彼のために購入した木に対するものであることは明白であり、そこにはメモが書かれている。「ロビンス氏」*Master Robyns* とトラデスカントが呼んでいるのは、フランスの有名な植物学者でかつ「植物園」*Jardin des Plantes* の初代園長であるジャン・ロバン *Jean Robin* (1550 - 1629年) であった。彼はジェラードが「パリのロビニウス」としばしば言及した人物である。「ハリエンジュ [ニセアカシア]」*Robinia* [*Robinia pseudoacacia*] という属名は彼の名にちなんだものである。

トラデスカント一族の墓石はランベスの教会墓地に今も見る事ができる。それは内陣の北東に位置し、1662年に息子ジョンの未亡人によって建立されたものである。趣のある墓碑銘は次のようなものである : -

「ここを通り過ぎる訪問者よ、行く前に知るがよい、この墓石の下に
眠るはジョン・トラデスカント、祖父、父、息子
息子は若くして亡くなり ; - ほかの二人は
人為と自然の世界を歩き尽くすまで生き通した ;
それは彼らの選り抜かれたコレクションからうかがえるように
陸、海、空の珍しいものの
彼らが (ホメロスのイリアスのように *in a nut*)
不思議に満ちた世界を一つの部屋に閉じ込める。
これらの有名な古物収集家たちはずっと
バラと女王ユリ双方の庭師であったが
今は自分自身を移植し、ここに眠る、そして
天使がそのトランペットで男たちを目覚めさせる時
そして炎が世界を清める時、彼らは起き上がり
この庭園をパラダイスに変えるであろう」

サー・ヒュー・プラットは、土壌と肥料に関し、当時最も学識の深かった人物と言える。彼はこの問題について 1594 年に出版したが、あわせて『人為と自然の宝庫』*The Jewel House of Art and Nature* という本も出した。ここで注目すべき彼のガーデニングに関する業績は『花のパラダイス』*The Paradise of Flora* というタイトルで 1600 年に初版が出され、そして再び 1660 年には第 2 部を付け加えて『エデンの園』*The Garden of Eden* というタイトルを付けて出版された。この最後の版はプラットの死後しばらくして世に出たが、チャールズ・ベリンガム Charles Bellingham という彼の「親族により」編纂されたものであった。「あの学識深い偉大な観察者」であるサー・ヒュー・プラット、「リンカーンズイン Lincoln's Inn [世界で最も名高い法曹協会] の騎士、郷紳」は、自分自身の庭園をロンドンに、広大な屋敷をセントオ－ルバンスの近くに持っており、また彼の著作の参照部分を見ると、サー・トーマス・ヘネッジ Sir Thomas Henneage [1532~95 年 政治家・エリザベス 1 世の廷臣] 所有の、エセックスのカプトホール Copt Hall で過ごすこともあったようである。彼は当時の庭師頭の全員と親しく、いかなる情報であってもそれを教えてくれた友人のおかげであることを示すという点で誠に良心的であった。したがってトゥイッケナムのアンドリュウ・ヒル氏、タバナー氏、ポインター氏のこと、薬屋のギャレット、庭師のピゴット、庭師のニコルソンほかについて、その名前、あるいはイニシャルでしばしば言及しており、彼らは全員、読者にとって、このテーマに関する権威としてよく知られていた人たちであることは明らかであった。彼は異なる植物に様々な種類の肥料を勧め、また土壌を一般的に改良することを勧めた。冬の間、シダ類が地面に広がり、そこでそれを掘り込んで - 「シダ類の灰は優れている」そして「煤は土地を肥やす」、「角を削ったもの」も。「タマネギと天日塩を混ぜて蒔けばとてつもなく成功した」。彼は注意深くどの植物にはどの肥料が一番適しているかを特定している。『人為と自然の宝庫』の扉のページ title page の裏側には、異常に大きな大麦の穂の絵を載せており、その説明として「ミドルセックスのビショップの丘で 1594 年に育ったもの、土地は sope の灰で施肥された」とある。

この当時のもう一人の植物愛好者で記憶に留められるべき人物はペニー博士 Dr. Penny である。彼の生涯について多くは知られていない。彼は医師で海外及びイングランド国内を旅行し、多数の植物を収集した。彼は当時最も著名な植物学者の友人であり、クルシウス、ゲスナー Gesner [Conrad von~, 1516~65 年 スイスの博物学者・医者]、ターナー、ローベル、ジェラードなどがいた。今はペニーの名前を覚えている人はほとんどいないが、これらの著者による言及のされ方を見ると、当時は有名であったに相違ない。ジェラードは彼のことを「トーマス・ペニー、ロンドン在住、医学博士、植物に関する非凡な知識をもってその名声は高く、第二のディオスコリデスとして有名・・・最近亡くなったが私を含め多くの人々がその死を嘆き悲しんだ」と話した。ジョンソンも「名声が高く立派な医師であり熟練の植物学者」と同じように語っている。彼は何種類かの植物を新しく紹介するとともに、在来種のいくつかについて最初の発見者であった。クルシウスはオトギリソウの一

種 *Hypericum balearicum* を “ *Pennaei* ” と彼の名にちなんで名付けたが、それは彼がマジヨルカから最初に持ち込んだからだった。フウロソウの一種 *Geranium tuberosum* も彼にちなんで名付けられた：この植物はターナーによってイングランドに持ち込まれたが、クルシウスがペニーからそれを受け取っていたので、ターナーは「ペニー博士に捧げる」こととした。

この頃の時代のガーデニングに関するその他の著作家は既に引用されてきたところであるが、彼らの生活については、その著作から知ることができる以上のものは、ほとんどわかっていない。果樹園と果樹を論じたウィリアム・ローソンは、北の地方の出身で自分自身の経験に基づき書いた。トーマス・ヒルは、自分のことをディディマス山 *Didymus Mountain* と自称したりして、何冊か出版したが、それらについて自分で書いたとは明言せず、「ガーデニング、農業、医学に関して最高と認められている著作者の中から集めた」としている（*『庭師のための迷路』1751年）。その他の著作者については名前すらわからないものもある。N.F.は1608年と1609年に果物について優れた論文を書いているが誰かは特定できていないし、他の著作者により引用されている多数の名前のどれにもこのイニシャルは該当しない。ただ、ジェラードによりセントジェームズのエリザベス女王の庭園の「熟練の管理者」として言及され、その庭園で彼が栽培したマスクメロンで有名なファウル Fowle は、Nで始まるクリスチャンネームを持っていた。